第88回マッセ・セミナー

「つなげる力
～アイデアを豊かにする方法～」

開催日：平成26年１月24日（金）

会　場：マッセOSAKA　５階 大ホール

講　師：教育改革実践家　藤原　和博 氏

つなげる力
～アイデアを豊かにする方法～

藤　原　和　博　氏
（教育改革実践家）

私は橋下大阪府知事時代の３年間、教育特別顧問を務め、その間、40日ほどかけて北は能勢町から南は岬町まで、25市町村の55小中高校を大阪府教育委員会と一緒に回りました。私と大阪との縁をもう少し話せば、27歳の時、リクルートの新規事業で情報誌を創刊するために、大阪に赴任していました。そういう縁もありまして、結構、頻繁に大阪に出没しています。

皆さんが行政の現場でいろいろな政策を考える時、あるいはそれを実行に移す時、もっともっといいアイデアが出るようになっていただきたい。とりわけ顧客志向の、市民が喜び、かつ、市民が市民となるべき施策のアイデアがたくさん出るように、固い頭を柔らかくしていただきたい。今日は、そのためにはどうしたらいいかという話をします。

１．はじめに

これは、仕事だけでなく、実は日本の教育問題を考える時にも役に立ちます。15年前に、20世紀の成長社会から21世紀の成熟社会に移りました。1997年が日本の高度成長がピークアウトした年です。この年に山一證券が倒産しました。翌年、北海道拓殖銀行が倒産します。1998年から日本は成熟社会に入っています。日本の個人消費は1998年から一貫して下がっていますし、自殺者数は、1997年まで２万数千人台で推移していたものが、1998年代から３万3,000人台に跳ね上がったまま下がりません。昨年少し下がったように見えますが、カウントの仕方を変えたようなので、怪しいと思っています。

成熟社会では、固い頭で処理能力が高くても通用しません。頭を柔らかくする必要があります。簡単に言うと、情報処理頭から情報編集頭へ、情報処理力から情報編集力へということです。これが、今日皆さんに学んでいただく主たるテーマになります。時代の変化に合わせて、頭もシフトしなければならないのです。

情報編集力のことを「つなげる力」とも呼びますが、この力が強いとアイデアがどんどん湧いてきます。対人関係も良くなってきますし、コミュニケーションレベルが上がり、チームワークも良くなっていくはずです。

今日の話は、皆さんの仕事をより活性化し、アイデアを多く出すという皆さんの仕事に密着した話であると同時に、日本の教育をそういう方向に振らなければいけないという教育問題でもあります。また、今日ご参加の皆さま方の中には、幼児から大学生ぐらいまでを子育て、もしくは孫育てしている方がたくさんいらっしゃると思いますが、皆さんのお子さんは、完全に成熟社会に生まれて成熟社会に育っていくのです。学校に入れておけば、確かに情報処理力は上がります。しかし、情報編集力が上がるとは限りません。小中高校ぐらいまでは、親の責任で情報編集力をどう付ければいいかを考えた方がいいですし、その後のキャリアを含めて、情報処理力と情報編集力は教育問題に非常に関わります。皆さんのお子さんを情報処理頭から情報編集頭に持っていくためにはどうすればいいかという問題でもあります。

さらに、情報編集力を持ち、頭を柔らかくしておくと、後半戦の人生が柔らかく開けてきます。日本人の人生観がこれから大きく変化するのです。そのことを述べたのが、私の『坂の上の坂』という著作です。去年12万部売れたベストセラーです。なぜそんなに売れたのかというと、日本人の40代後半から50代、60代の方が、後半戦で結構行き詰まっているからです。人生をもっと豊かに開いていくためにはどうすればいいかということをかなり詳しく述べているので、それだけ売れたということです。

つまり、今日の話は皆さんのお仕事の話であり、教育の話であり、人生全般の話にもつながるわけです。この話を、最初にしっかり理解していただきます。２番目に、情報編集力を上げるための練習、３番目に人生への応用編という順番で話をしていきます。

２．700/800問題を解く

では、頭を柔らかくするために、１つ問題を出します。皆さんには、今から避難所の所長になっていただきます。東日本大震災が発生してからそろそろ３年経ちますが、大阪にもいつ直下型地震が来るか分かりません。もし他の人が続々と亡くなって皆さんが生き残った場合、皆さんのような立場の方は避難所の所長になる可能性が非常に高いので、リアルに考えていただけれ

ばと思います。

イメージとしては、宮城県石巻市辺りの、震災から１か月半～２か月ぐらい経った状態の中での避難所の所長です。皆さんの避難所には、800人が避難しています。最初の２週間は地獄のような光景があちらこちらでありましたが、１か月半ぐらいたつと、当初の緊急時の感じはありません。自衛隊も入っており、１日に１回は炊き出しが行われていますので、温かいものが１日に１回は食べられています。

そういう中で、東京から青年がやってきました。話を聞くと、「友人のパティシエが夜なべしてロールケーキを作った。ロールケーキは生ものなので、朝６時に仕上がったものを６～７時間かけて持ってきた。これを、おじいさんやおばあさんはもとより、とりわけ子どもたちに食べてもらいたい」ということでした。ところが、ロールケーキは700個しかありません。皆さんの避難所には800人の避難者がいます。このような状況の中で、皆さんはどのような判断をするでしょうか。

これは現実に起こった問題で、運んでいった避難所のほぼ半分で受け取りを拒否されたのです。受け取りを拒否した避難所には、特徴がありました。学校関係者が責任者だったところです。体育館の管理責任者である教頭先生が避難所の責任者になっていたところには、ほとんど拒否されたのです。町会長や市議会議員、あるいは私企業の人や地元で有力な人が責任者になっている避難所では、あまり拒否されることはなかったのですが、学校関係者がとりわけという話です。教育委員会の人には耳が痛い話だと思いますが、日本の教育の世界、特に義務教育の世界は、正解主義、前例主義、事なかれ主義がはびこっていますので、800人の避難者に対して700個のロールケーキを受け取ると不公平になる、分ける時に失敗したら文句が出る、その責任を取るのは嫌だと考えるわけです。

私は、この話を聞いてとても頭にきました。「正解主義、前例主義、事なかれ主義をふりかざしていると、東北はそれによってつぶされる」と批判しました。東北が地震によってつぶされることは絶対にありません。しかし、正解主義、前例主義、事なかれ主義、特に員数合わせが問題です。800人の避難所には800個持ってこいと言うのです。融通するとか、足りないのであれば工夫するとか、知恵を出すということをしないのですから、どんなに支援をしても大変な無駄がいろいろなところで起こります。

後で調べたら、カップヌードルでさえも同じ目に遭っていたのです。800人の避難者がいるところに700個のカップヌードルを持っていった人が拒否されたというのです。考えられない話です。

避難所の責任者、とりわけ教頭先生が少しイマジネーションを働かせれば、例えば、全員が甘いものが好きなわけではないということが分かったのではないかと思います。普通、いろいろな人がいたら、２～３割の人は今は別にケーキは要らないという人です。ですから、ケーキをそのままどんどん配っても、何の問題も起こりません。そういうちょっとした想像力が働くかどうかが、仕事ができる行政マンとできない行政マンに分けるのです。

さらに、半分に分ければいいということに気付いた人もいるでしょう。半分に分けると1,400個になりますので、800人に分けると600個余ります。皆さんが避難所の責任者になった時に覚えておいてもらいたいのは、この余った600個をどう使うかです。

避難所生活が１か月、２か月、３か月と経つと、壁の向こうではご遺体を捜索して、いったん土に埋めておいてという地獄のようなことが起こってはいるものの、壁のこちら側では生きている人たちがデイリーライフを送っています。しかも、それぞれの家族同士の間にはダンボールの間仕切りぐらいしかありませんから、どんどんフラストレーションがたまってきます。このストレスをどうやって抜くかが避難所所長の最大の役割です。

そのためには、エンターテインメントが必要です。この600個をどうやってエンターテインメントに使うかという知恵を回していただきたいのです。皆さんならどうしますか。１つはじゃんけん大会です。じゃんけんはフェアですから、老いも若きも、おじいちゃん、おばあちゃん、孫も一緒になって、「じゃんけん、ぽん」という声が体育館中に響きわたるのもいいと思います。私なら、ほんの小さなスペースでいいので、たこ糸でつって、パン食い競争のようにします。おばあさんが走ってきて食いついたら入れ歯が外れてしまって、それをみんなで笑う。これが大事なのです。壁の向こうが地獄であればあるほど、ユーモアや笑いがとても大事です。そういう使い方も考えられます。

もう分かったと思いますが、もし800人の避難所に800個のロールケーキが運ばれてきたら、左から右へ処理して終わりです。何の知恵も出ないと思います。800分の700だから、足りないから、そこに知恵が生み出され、人間ド

ラマが生まれ、さらに教育的効果もあるのです。

校長をした身として、私ならこうすると思います。小学生、中学生、高校生、大学生を集めてチームを作り、情報を与えて考えさせます。例えば、「俺のところは800人の避難者がいるけれど、700個しかロールケーキが来なかったんだ。どうする？」と言うと、小学生、中学生、高校生、大学生がそれぞれ考えます。小学生は、習ったばかりの最大公約数と最小公倍数で一生懸命考えると思います。しかし、どう考えても８分の７にしかならないので、どうするかという話になります。中学生の中には、「１個を８つに分けたらどうか」と考える人がいるかもしれません。高校生は、習ったばかりの微分・積分を使って解こうとするかもしれません。大学生はどういう知恵を出すでしょうか。その後、４組にプレゼンをさせて、おじいちゃんやおばあちゃんの拍手が一番多かった案で配ったら、文句が出るわけがありません。これが納得解というものです。

この時点で、「公平とは何か」という問いの結論をほぼ言っているのですが、15年前までの成長社会であれば、上から目線の「量の平等」が公平でした。みんな一緒という感覚の時代だったからです。しかし、今は一人ひとりの時代になっています。価値観が多様化し、複雑化し、変化が激しい時代です。こういう時代には、むしろ下から目線の、一人ひとりの「納得解」が公平を保証するのです。成熟社会に入ったのに、上から目線の「量の平等」をしていると、例えば半分ずつ配ったとしても、何らかの理由で食べたくない人にも無条件に配ることになるため、そこにはものすごい不公平、いじめのようなことが起こることになります。同じことが、今、義務教育の世界でも起こっています。

明治の学制公布以来、140年間続いている一斉授業がそうです。同じ教科書を、同じ教員が、同じスピードで、同じ場所を一度だけ教えるというシステムは、実は富国強兵下の兵隊をつくるシステムです。あるいは、企業戦争下で企業戦士をつくる、工場の工員をつくるシステムです。それが140年間見直されずに、今も延々と続いているのです。その結果、この30～40年に何が起こったかというと、同じスピードで同じことを１回しか教えないシステムなので、例えば小学校３年～４年の算数から落ちこぼれがどんどん出ています。小学校３年ぐらいの時に、算数で抽象化の問題が起こってくるのです。

それまでは２個のリンゴと３個のイチゴを足したら幾つですかというように、生活に密着したことを教えているのですが、小学校３年から、いきなり５分の３などということが出てきます。５分の３と0.2を足すというようなことは、子どもの世界では絶対にあり得ません。団塊世代の人なら、兄弟５人にリンゴが３個という場面はあったと思いますが、今の子にはそういうことがないので、どんどん抽象化が起こってきて頭が混乱してしまいます。ですから、小学校３年ぐらいで約半分の子が落ちこぼれます。それがそのままリカバーできないので、中学に入って数学が分からなくなります。そして、そのうちの半分ぐらいが学校を荒らすという感じになるわけです。

このように、一方で落ちこぼれを増産しているのですが、さらに言うと、もう完全に分かっている子どもはお客さんになってしまっています。これを吹きこぼれと言っています。つまり、一斉授業では、いったん算数や数学が分からなくなった子どもに対しては完全にいじめのようなことが起こっており、できる子どもにとってもネグレクト、虐待のようなことが起こっているのです。

時代が完全に成長社会から成熟社会に移っているのに、成長社会の感覚のままで、上から目線の「量の平等」が公平だという形で行政を進めていると、これからはことごとく否定されていきます。そうではなく、一人ひとりの「納得解」がいいのです。つまり、欲しくないという人には配らなくていいということです。これが非常に大事なところです。

この話の最後に、私が本当に感動したアイデアがあります。避難所なら、100～200リッターの大きいごみ袋がいっぱいあるはずなので、１つのきれいな袋にロールケーキを全部入れて、粉に戻せというのです。半個ずつ分けると、満足度曲線が階段状になりますが、粉に戻せば、糖尿病だけれども少し甘いものをなめさせてほしいという人にも、一さじ、なめさせてあげられます。たくさん食べたい人は30杯でも食べればいいのです。そうすると、満足度曲線が階段状ではなく、なだらかになります。これはまさに微分的な解決です。

３．成長社会から成熟社会へ

20世紀の成長社会は終わり、21世紀の成熟社会が1998年から始まっています。「みんな一緒」という感覚が強かった時代から、一人ひとり、ばらばら

になっています。学校の子どもを見ていてもそうです。非常に多様化が進んでいます。軽度発達障がいの子が５人いるからといって５人まとめて考えたら、大変な騒ぎになります。一人ひとり違うからです。社会のあらゆる面で多様化が進み、複雑化が進み、変化が激しくなるのが、成熟社会の特徴です。

もう１つだけ言うと、「みんな一緒」の時代には、日本人の幸福感も大体共通していたように思います。お父さん、お母さん、先生の言うことをよく聞いて、いい学校に入って、いい大学に入ると、公務員や教師、会社に入って課長ぐらいになれる。課長ぐらいになると、ある程度の年収があって、60歳になると退職する。退職金で別荘を建てる。そのうち孫が生まれて、孫が訪ねてくるようになる。孫も高校や大学に行くと来なくなる。寂しくなるので犬を飼う。朝と晩に犬の散歩をしているうちに心臓が悪くなって、盆栽を10年ぐらいしていると死ねる。そういう日本人の一般解としての幸福感があったと思うのです。

資本主義や民主主義は、こういう共同幻想が強くないともちません。ところが、この共同幻想が15年前に壊れてしまったのです。そんな幸福感を国は保証できないし、企業も一生涯支えるわけにはいかないことが、山一證券の倒産からばれてしまいました。自分の幸福感は、一人ひとり自分で編集しなければいけない時代に入っているのです。皆さんのお子さんは、間違いなく一般解としての日本人の幸福感には乗れません。これに乗れたのは団塊世代以上の人です。50代後半以下の人は乗れません。

流れに乗っていれば経済成長のおこぼれがもらえた時代が終わって、自分自身の幸福論を形づくらなければ幸せになれないというのは、結構タフなことです。情報処理力だけを鍛えているとIT化・ロボット化でどんどん仕事が奪われていきますし、それでも漏れる単純労働のような仕事も、中国やインドから人が押し寄せてくる、あるいは中国やインドへ発注されて、どんどんなくなっていきます。ですから、一人ひとりの幸福論を自分で編集できる子どもを育てなければいけませんし、情報処理力よりも情報編集力を問われる仕事が多くなっていくはずなので、頭を切り替えなければなりません。

みんな一緒の時代には、正解がありました。今のような幸福論もそうですし、大きいことはいいことだ、安いことはいいことだということで、正解を速く正確に言える情報処理力が重要でした。ですから、日本の教育は戦後一

貫して情報処理力偏重だったのです。ところが、今はそうではありません。皆さんの周りで起こっていることも、あるいは皆さんが日々している仕事も、正解が１つということはなくなっていると思います。そうなると、先ほどの800分の700の問題に近いのですが、自分が納得し、かつ、関わる他者が納得する解をどれぐらい紡げるかという話になります。自分が納得していなければ人を説得できません。自分が納得し、かつ、目の前の関係者、さらにその関係者も納得させられる解が「納得解」です。正解ではないのです。納得解をどれぐらい紡げるか、納得解を紡ぐためにどれぐらい自分の知識や経験を編集できるか、組み合わせられるかということで、この納得解を紡げる力のことを「情報編集力」と言います。

情報処理力と情報編集力の違い、あるいは時代の違いを納得していただけたでしょうか。では、それをスムーズに皆さんの頭にインストールするために、情報編集力とは何かということをもっとつかむために、もう１つだけ例題を出します。

今から皆さんはタイヤメーカーの社長です。技術もコストも開発期間も気にしなくていいので、世の中にないタイヤを考えてください。こんなものがあったらすてきだ、こんなものがあったら買うという感じでいいので、アイデアを言ってください。ただし、私が今から２つの方法で問い掛けます。１つは、今この瞬間も学校の先生がしている正解主義の世界の問い掛け方です。同じ問題でも、情報編集力を引き出す時には違う問い掛けが必要なので、この２つを比較して、頭の使い方がどう違うかを体験していただきます。手を挙げる必要はないので、思い付いたら言ってください。

最初は、恐らく皆さんが小中高校で何千回と繰り返された問い掛け方です。「分かる人。いないの。こんなに簡単な問題なのに。大阪は学力が低いんじゃないの。分かる人」。こういう問い掛けをすると、直前に「手を挙げる必要はないので、思い付いたら言ってください」と言ったにもかかわらず、誰も何も言いません。これが起こるのは、日本だけだということは覚えておいてください。

海外ではどうかというと、私はロンドン大学のビジネススクールで教えていた経験もありますが、これだけの社会人がいて、もしああいう問い掛けをしたら、いろいろな案がどんどん出ます。私が後ろを向いてホワイトボードに何か書いている最中でさえも、ばんばん出ます。ただ、日本と様相が違う

のは、最初に出る案が、日本人なら絶対に言わないようなばかげた案だということです。例えば、食べられるタイヤなどという案が出てきます。笑ってしまいますが、そういう案を第一線で活躍する大企業のゼネラルマネジャーのような人が言うわけです。そうすると、他の人が気を緩めていろいろな意見を言います。それを聞いていて、３分後にはもっといい意見を言います。５分後にはもっと進化した意見を言います。こういうモードのことを修正主義モードと言います。正解主義モードと修正主義モードの対比です。

皆さんがなぜ黙ってしまったのかというと、皆さんの頭の中が完全に正解主義モードだからです。正解主義モードでは、正解を答えようとします。ですから、私が「分かる人」と問うた瞬間に、正解でなくては言ってはいけないと思ってしまったのです。正解とは、答えた瞬間に他の人から拍手が出るような、１＋２＝３、２×３＝６といったものです。ところが、私が問い掛けているのは、800分の700のような正解がない問題です。ですから、何を言ってもよかったのです。そうであるにもかかわらず何も言わないのは、皆さんの頭が正解主義モードになっているからです。これを修正主義モードに振らなければいけません。学校や塾、予備校に入って勉強すれば正解主義モードには行きますが、修正主義モードにはなりません。

では、修正主義モードに変えるにはどうすればいいか。３～５人で組んでブレーンストーミング（知恵出し）をします。そのコツを２つ教えておきたいと思います。１つ目のコツは、他のメンバーの意見を絶対につぶさないということです。組んだ人がどんなに気に入らない人でも、その人の人格はどうでもいいので、アイデアを全部称賛します。褒めて褒めて褒め倒すということです。

２つ目のコツは、最初の２周か３周は、わざとまともな意見を言わないことです。堅い組織は、ほとんどこれができていません。ですから、ろくなアイデアが出ません。皆さんは今までブレーンストーミングをしたつもりになっていたかもしれませんが、そんなブレーンストーミングでは駄目です。この２つ目のコツを、ぜひマスターしていただきたいと思います。最初は、わざとくだらない意見、とんでもない意見、できそうもない意見、全く不可能な意見だけを言います。

なぜこのようなことを言うのか。皆さんの頭は、今、私の説明を聞いている瞬間も、実は正解主義に戻っています。ですから、そこから出なければい

けません。正解主義のまま知恵を出そうとしても駄目なのです。そのために、２投か３投、くだらない案を言いまくっていただきます。今日は、自分の人格に対する挑戦だと思ってください。横にいる人は知っている人かもしれませんが、この人と二度と付き合いたくないと思うぐらいひどい案を、わざと言ってください。そうすると相手が離れます。離れて、間の面積が広ければ広いほど、その間からいい案が出てきます。知ったかぶりをしてまともな案を言い合っていても、ろくな案は出ません。ですから、できるだけ離れてください。これは非常に大事なことです。

単なる頭の回転の速さではなく、頭の柔らかさが大切なのです。頭が柔らかいというのは、つながりやすいということです。

ブレーンストーミングは、自分の脳と相手の脳をつなげるということです。つなげて、自分の脳を拡張しているのです。例えば、佐藤さん、田中さん、鈴木さんがいたとしたら、「佐藤・田中・鈴木脳」「佐藤・田中・鈴木人格」「佐藤・田中・鈴木キャラ」を形づくって、その間でアイデアをどんどん生み出していくのです。そのように脳を拡張することが、どれほど次から次へとできるかです。つながらないで、集中して、左から右へ一気に片付けるような仕事の仕方ではなく、つなげるのです。この頭の切り替えがどれぐらい速いかという話です。

普通、その真ん中に養老孟司さんが言った「バカの壁」が立っていて、切り替えができない人は正解主義に行ってしまいます。伸びしろのない人がたくさんいますが、そういう人は情報処理力ばかりを鍛えていて、世界観が全くありませんし、自分で問題を発見できません。そういう人が今はたくさんいます。間にある「バカの壁」を取るためには、わざとバカになって修正主義に頭を振ることがとても大事です。

頭をつなげて、人の知恵と技術も利用できる人が勝つのです。若い人であればFacebookやTwitterでネットの向こうの人とも頭をつなげて自分の脳を拡張し、問題解決に当たれる人が勝つのです。これが情報編集力の正体です。自分の中のメモリー同士をつなげるのではなく、人の頭のメモリーにまでつなげて、バーチャルに脳を拡張できるかどうか。それを易しい言葉で「つなげる力」と呼んでいるのです。頭の回転が速くて、かつ頭が柔らかい人が「頭がいい人」ですので、皆さんのお子さんもぜひそのように育てていただきたいと思います。つなげる力こそが、伸びしろと呼ばれるものです。

なぜなら頭が拡張できるからです。脳が拡張できれば、当然、伸びしろは大きくなります。

今の内容は、「よのなか科」という、私が12年間やってきている授業のエッセンスです。学校で行われる「よのなか科」の授業に地域の人たちを呼んで、地域社会の人がどんどん入ってきています。そういう授業で地域社会の人材と小学生、中学生、高校生が交わると、地域の人にとって全く新しいエンターテインメントになります。

なぜかというと、相手から面白い案が出れば出るほど、自分も刺激されて面白いことを考えるからです。つまり、頭が柔らかい小学生、中学生、高校生たちとブレーンストーミングやディベートやロールプレイングをすると、頭が刺激され、おじいさんやおばあさんであっても若返るのです。ですから、学校にボランティアに行くのではなく、エネルギーをもらいに行くような感じになります。そういう人たちが増えると、学校のファンが増えます。その学校のファンが核になって、和田中学校では学校支援地域本部が立ち上がりました。

学校支援地域本部には、PTAとは違って、和田中学校に息子や娘がいない人も、おじいちゃんやおばあちゃんも入っています。とりわけ頼りになったのは団塊世代の人たちです。海外赴任歴16年とか、英語だけでなくスペイン語が流暢という人が、探せばたくさんいます。そういう人たちが続々と和田中学校を手伝うようになってくれました。土曜寺子屋、あるいは放課後の図書室の運営も全部、地域の人に任せています。この方式は、文部科学省が50億円ぐらいの予算を取って、今、日本中に、4,000か所ぐらいまで広がっています。もう一息、6,000か所～１万か所ぐらいまで広がってもいいのではないかと思っています。

地域社会が学校を核にして再生し始めると、地価が下がらないのです。つい最近、和田中学校の横を大手不動産会社が開発して、和田中学校区であることを売りにマンションを建てました。即完売です。空き家率も下がっています。つまり、学校を核に地域社会を再生し、地域社会の人が学校にどんどん入ってきて学校が良くなると地価が上がる、つまり、経済振興にも関わってくるということです。ですから、首長部局と教育委員会が別々の動きをしている場合ではありません。一緒にやるべきなのです。

「よのなか科」のゲストは、杉並区で産業振興課と手を組んで組織的に送

りこんでもらいましたし、私が大阪府教育委員会のアドバイザーだった時には、大阪府の産業振興課と教育委員会の間に会議を作って、中小企業にいる面白い人や技術を持っている人を、組織的に小中学校に入れてくれるように頼みました。

以上、情報編集力については完璧にイメージを持っていただけたと思います。皆さんの子育てでも同様です。情報編集力を大事にして育てるためには、日常、家の中でも、先ほどのブレーンストーミングのようなことをしていただけるといいと思います。例えば、お子さんが幼稚園、小学生、中学生であれば、今まで世の中になかったコップを考えてもらってもいいです。思考する練習が大事なのです。世の中になかったコップといっても、皆さん困ってしまうかもしれませんが、今まであったものは、みんな上に穴が開いています。当たり前だとおっしゃるかもしれませんが、上に穴が開いていたのでは飲めない人がいます。寝たきりの人です。そこで、上をふさいで横から出るようにしたのが、病院で使われている吸い口です。今、皆さんが手にしている全ての商品は、その前の商品を否定するところから出てきています。つまり、世の中になかったものは何か、今まで常識だったものを覆すところから出てきているのです。クリティカルシンキングというやり方で、正解主義の方にある常識や前例を疑ってかかると、バカの壁を崩して、修正主義の方に行けます。常識を疑ってかかるか、思いきりバカなことを最初から考える。そういう技術を皆さんに伝授したつもりです。

４．つながる力アップのための自分プレゼン術

さらに皆さんのつなげる力をアップするために、割と安上がりに練習できる方法を今かやっていただこうと思います。職場でも、日常のいろいろな局面でも練習できます。

今日は２つの練習をしてもらいます。１つは、キャッチフレーズ型（つかみ型）の自分プレゼン術です。皆さんは、初めての人に会った時、目を見てにこっと笑い、「おはようございます」などと挨拶をした後、すぐに名刺を出してしまうと思いますが、それをぐっとこらえて、自分のキャラの一部を切り出して、相手の意識を握れるかどうかです。最初にぱっと相手の意識を握れれば、その後の話は非常にしやすくなります。大阪人であれば、これは基本技術でしょう。

ぱっと相手の意識を握るというのは、脳科学的に言うと、相手の脳と自分の脳をさっとつなげられる、リンクできるということです。それができると相手は話を聞くモードになりますから、それから会社の話や行政のサービスの話をすると、相手が聞きやすいのです。これは非常に大事な技術です。自分のキャラをどのように編集すれば相手とつながるかを考えるので、情報編集力の基礎的な練習には一番いいと思います。

では、今から２人で組んでいただいて、キャッチフレーズ型（つかみ型）の自分プレゼンの練習をしていただきます。いきなりやれと言われても困ってしまうと思うので、２つほど例を言います。まず、私と同じ手法を取れる人が、多分どの会場にも100人に１人ぐらいいます。誰がどう考えても、ある有名な人に似ているという人は、自分の顔を少しいじるだけで相手が笑ってくれます。つまり、出会った瞬間に相手に敵だと思われなければいいのです。味方かどうかはその後の勝負です。

ただ、この方法を取る時に一番大事なのは、その有名人を相手が知っているということです。相手の頭にあることで勝負するのが、一番のコツです。

次は名前です。とても難しくて読めないとか、例えば、山口県萩市で３軒しかいなくて、大阪に出てきたら１人というような名字であれば、それをうまく説明すれば打ち解けられます。名字の他に、下の名前をいじるという手もあります。そういう人は10人に１人ぐらいです。

あとの９割の人は、顔も使えない、名前も使えない人です。そういう不自由な人こそ、クリエイティブに、自分のどこを切り取れば目の前の人にウケるかということを考えなくてはなりません。１回やってみてウケないと思ったら、もう１回違う切り口でやってみてください。これは練習すればするほどうまくなります。コツは、正解主義からいかに離れるかです。

人間誰しも、正解主義モードにいた場合は特にそうですが、自分はこういう人だという自己認知が頭の中にあります。それを起承転結をはっきりさせて語るのは、自己紹介です。私は自己紹介しろとは言いませんでした。自分プレゼンです。起承転結があるのであれば、転だけを言った方がいいです。自分の頭の中にあることを起承転結をはっきりさせて解説するだけならば、パワーポイントを使おうと何を使おうと、それはエクスプラネーションであってプレゼンではありません。プレゼンというのは、相手の頭の中にあることを使って、相手の頭の中にあることを編集していく行為です。言い方を

換えれば、相手の頭の中の映写室に映像を映し込むことです。

TED（Technology Entertainment Design）のプレゼンをテレビでご覧になったことがある人もいると思いますが、あれは自分の言いたいことを話しているのではありません。自分の言いたいことを話していたのでは、絶対に伝わりません。皆さんの頭の中にある疑問を取り出して、そこにある種の映像を映し込んでいるのです。今度、そういうつもりでTEDのプレゼンを見てもらうといいと思います。プレゼンとは相手の頭の中にあること使って編集していくことであり、自分の頭の中にあることを解説するだけではエクスプラネーションであるということが分かるだけで、プレゼンが通る確率が上がると思います。相手の世界観の中で話さなければいけないということを、ぜひ頭に置いておいてください。

もう１つ、自分と相手をつなぐ力の基礎技術として練習してもらうのは、Ｑ＆Ａ型です。インタビュアー役とインタビューされる側を決めていただき、私がスタートと言ったら、２分間、インタビュアーは続々と個人的な質問をしてください。どんな質問でもいいです。。その代わり、答える側は、答えるのが嫌であればパスして結構です。つまり、答える側には、答えない権限があるということです。その中で、インタビュアー側は、相手から自分との共通点を探ってください。一種のインタビューゲームです。

ただし、探ってもらう共通点には条件があります。その共通点が探り出せた時に、「ああ、そうなんだ」というように、両方が少しうれしくなるようなことであることです。その共通点について、15分でも30分でも話していたいと思うようなことを幾つ探り出せるか。２分間で２つ以上探り出せればなかなかのものですし、今まで何百回としていますが、大体どのチームも１つは探り出せています。

どんな共通点を探ってほしいかについて、もう一回、具体例を述べます。「眼鏡を掛けている。一緒だ」というような志の低いことでは駄目です。それは確率が高すぎて、うれしくも何ともないです。大阪で阪神ファンを見つけても珍しくも何ともありませんが、あの弱かった楽天の数年来のファンで、かつ、同じ選手のファンであればレアなので「今から飲みに行きましょう」となると思います。あるいは、同じ小学校出身であれば感動的ですが、そこまでいかなくても、「ああ、そうなんですか」という感じで、その共通点を見つけ出したことを双方が喜ぶようなこと、ちょっとうれしくなってし

まうようなことを探り出してください。

Ｑ＆Ａ型は20分ぐらい続けても疲れないと思いますので、職場に帰って縦横無尽にしてみてください。自分のセクションの縦横斜めにこれをするだけで、次々と絆が見つかって、ひとりでにチームビルディングが行われます。全体のコミュニケーションレベルも絶対に上がっていきます。人間は、共通点がある人を信頼するのです。

また、過去にした挫折や最近した失敗、病気など、マイナスモードのことだけを聞くと、どうなるでしょうか。例えば、私は30歳の時にメニエール病になったのですが、メニエール病になったことのある人は、無条件に飲みに行きましょうという感じです。マイナスモードで絆が見つかると、プラスモードよりも関係が深くなります。人間のコミュニケーションには、そういう特性があります。どこかに研修に行かなくてもできますので、ぜひあらゆる機会に試していただければと思います。

20分ぐらいやると、１つの共通点では点の関係、２つだと線、３つだと面、４つぐらいから立体になります。つまり、世界観そのものを共有してものを見るようになるのです。そこからは早くて、５つ、６つぐらいすぐ出てきます。そういうことをぜひ確認してみてください。共通点が５つか６つぐらい見つかると、結婚してもいいかなと思うぐらいになります。家に帰って夫婦でやってみるという手もあります。

以上、コミュニケーションの非常に大事な話をしました。つなげる力をアップするための職場でもできる練習法をお話しして、最後に日本人の人生観がどう変わるかという話をします。

５．日本人の人生観が変わる!!

生まれてから死ぬまでのライフサイクルを考えてみます。横軸が年齢、縦軸がエネルギーレベルだと思ってください。大体の人は、ピークが１つの「富士山型の一山主義」のイメージを持っています。30代、40代、50代がピークで、ここで一仕事したら、あとは慣性の法則で老いていくという感じです。日本人は基本的にこういうイメージを持つ人が多いと思います。この人生観は誤りだということを、今から証明してみせます。

この人生観が正しかったのは、明治期の「坂の上の雲」の人たちです。ロシア打倒、日本の独立のような理想や夢があって、それに向かって山を登っ

ていくわけです。走っていたかもしれません。40代で一仕事すると、1900年代に生きた人たちは、ここで人生を終わったのです。あのころは平均寿命が40代でした。

ところが、今は人生が倍に延びています。今40代の女性ならば、あと50年あるのです。50年あると言われた瞬間に、「よっしゃ」と思ったか、「えー」と思ったかは、非常に大きい違いです。50年あるとすると、この人生観では絶対に駄目でしょう。寂しくなってしまいます。では、どうすればいいかです。

ここで「坂の上の坂」が登場します。坂の上にまた坂があったら疲れてしまうという話ではありません。山並みを連ねていきましょう、できたら最後の坂を登っている時にぷつんと事切れたい。これが、「ピンピンコロリ」という全国のお年寄りが理想とする死に方であり、私も理想としています。

山並みを連ねるということで、関東だと「八ヶ岳型」と言います。ここで一番気を付けなければいけないのは、今は組織の山を登っていますが、勢いをなくした時に自動的に登れるかというと無理です。この山は、横から見れば連山に見えますが、上から見たら全部縦に走っている違う山です。ですから、それぞれの山に裾野が必要で、今の時点でそういう裾野がないと連なった山は作れません。組織で働く他に、例えば小学生や中学生のお子さんがいれば、地域社会に少しはびこっておいて、そこでコミュニティーを作っておく、もしくはコミュニティーに加わっておく、そのコミュニティーを育てておくということが必要です。

私は、地域社会では、テニスのコミュニティーがあります。週３回ぐらい、夫婦でテニスをしています。もう１つ、被災地支援のコミュニティーもあります。私は石巻市の雄勝というところで15年ぐらい定点観測を続けようと思っているのですが、そこで発生した孤児をサポートする組織として、三枝成彰氏や林真理子氏と「3.11震災孤児遺児文化・スポーツ支援機構」を立ち上げています。そこで15～20年サポートし続けるのではないかと思っています。その他にも、自分がオリジナルで発想した腕時計やリュックを、工場を持たずに、ネットを使ってマニュファクチャーが生まれるということもやっています。それから、２級ヘルパーの資格を40歳ぐらいの時に取ったので、私の父母はまだ元気ですが、介護が発生したらそちらの世界にも行けると考えています。

私の主旋律は義務教育改革なので、それは徹底的にやっていきますが、50代ならそういう５本ぐらいの人生を出していいと思います。30代なら主旋律とは別に２本ぐらい、40代ぐらいなら３本ぐらい持っておいて、どこのコミュニティーを育てるか、どのように育てていくか、そのコミュニティーにどのように加わっていって自分の役割をそこに求めるのかということ考えていく必要があります。

コミュニティーに入っていく時には、自分プレゼン術が欠かせません。仕事としてコミュニティーに入っていく時には名刺を出してもいいかもしれませんが、自分のコミュニティーを地元で育てる時には、名刺を出すのはご法度です。そうではなくて、自分のキャラで勝負してもらいたいです。そのためにも、自分プレゼン術は絶対に欠かせません。情報編集力があればあるほど、皆さんの主旋律以外の部分のコミュニティーが豊かになります。その裾野がどんどん育っていって、コミュニティーの山になります。つまり、山の高さはコミュニケーションの量であり、山の豊かさ、緑の豊かさはコミュニケーションの質だろうと思います。

夫が40代～50代ぐらいになって５本ぐらい人生を出し、妻も５本ぐらい人生を出します。その時に、１本か２本は共通の裾野を登った方がいいと思います。私であれば、地元のテニスコミュニティーと被災地支援が共通です。あとは全然違います。夫婦で５本ずつ出したら、そのうち１本か２本は共通の裾野を登りましょう。もし１つも共通の裾野を登らない、つまり共通点がないのであれば、遠慮なくメンバーチェンジだと思います。人生があと40年もあるのに、無理ですよね。

子育てをしていると、息子・娘の敵は共通の敵になるので、夫婦は戦友になれます。少し大きくなると息子・娘の敵は大体学校や先生だったりするので、学校は夫婦の円満に貢献していると言えます。ところが、子どもが高校、大学に入ると、それこそ敵がいなくなってしまうので、夫婦の会話が途絶えます。そこからは、先ほど私が言ったように被災地支援などのプロジェクトや仕事のようなものに夫婦で取り組むようにしないと、会話がほとんどなくなります。それを見つけるまでの時間を稼ぐために私が勧めるのは、犬を飼うことです。お互いの名前を呼ばなくなっても、犬の名前だけは呼ぶのです。うちの犬はハッピーというのですが、「ハッピーにエサやった？」「水はやった？」「散歩はした？」というように会話をします。そうやって時間

を稼いでいるうちに、40代後半から50代にかけて、仕事のようなプロジェクトを夫婦で育てていくことをお勧めします。コミュニティーをどんどん豊かにしていくということです。

皆さんも、行政の仕事でコミュニティーを作っていると思いますが、コミュニティーが豊かになればなるほど、当然、本業にも返ってきます。つまり、情報編集力が豊かになり、本業も豊かになるはずです。ぜひ多くのコミュニティーの中で自分を発見してもらいたいと思います。